



ウィメンズ ブックス 第16号

1985年

9月10日発行

(年会費 1,500円)

Women's Books

ウィメンズ ブックストア

発行所 有限会社 松 香 堂 書 店

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

電話 075-441-6905

振替貯金口座 京都8-7950

——女性の本と女性の為の情報をお知らせするウィメンズブック友の会会報——

ウィメンズ ブック 目 録 (16)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共にお振込み下さいますようお願い致します。
ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～ 3,000円の場合	400円
3,001円～ 5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

論 争 (50音順)

(フェミニズム・母性・家事・主婦)

〔い・え・お〕

「いのちの女たちへーとり乱しウーマン・リブ論」

田中美津 田畑書店 1972年 1200円
日本におけるウーマン・リブの誕生を知る手がかりとなる本。本書のもつオリジナリティは新鮮である。1970年代初めのウーマン・リブの息吹きを感じさせ、一度は読んでおきたい本。

「エコロジストの実験と夢」 ジャン ポール リブ編

辻 由実訳 みすず書房 1982年 1800円
フランスのジャーナリストである編者と3人のエコロジストの対話集。世代や社会的経験の異った3人がなぜ、いまエコロジーにこだわって活動しているかが明らかにされている。第三世界の飢餓、社会と自然、地球の友の組織のことなど興味深い。

「男世界と女の神話」

E・ジェインウエイ 内野久美子、佐々木洋子訳 三一書房 1975年 1800円
男女の性差別の発生から、現在にいたるまでの差別の構造を社会学的に解明した本。

「男と女の性差—サルと人間の比較」 G・ミッチェル

鎮目恭夫訳 紀伊国屋書店 1983年4月 2400円
サルにおける雌雄差と人間における男女差を進化論的見地から比較・考察することによって性差の核心に迫る。生物学的性差と社会的・文化的性差との線引きはどこでなされるのか？男女の問題を考えると避けて通れない性差の問題の手がかりとなる本。

「女とは何か—イデオロギーの歴史」 V・クライン

水田珠枝訳 新泉社 1982年 2000円
女とは何かを19世紀後半から20世紀前半にかけての思想家の女性論を分析批判し、現代社会の新しい女性像確立の手がかりとする。V・クライン (1907～1972)

「女の意識・男の世界」 シーラ・ロバトム 三宅義子訳

ドメス出版 1977年 1500円
著者は1943年生まれのイギリスのウーマン・リブの指導的理論家。

「女の自立と男の自由—性別分業の解体を求めて」

菅 孝行 毎日新聞社 1984年 1200円
男性が書いたフェミニズム論。主に女性の労働のあり方を考える。男が女に対して抑圧者でありつづけるような人間解放はニセモノである。女性の解放を通じて様々な社会の抑圧・差別の廃絶をめざす労働論。

「女の人権と性—わたしたちの選択」

日本家族計画連盟編 径書房 1984年 1200円
性と文化、性と労働、女の人権と性など＜優生保護法改悪阻止＞シンポジウムの活発な議論を集録。各界の女性の意欲的な発言は、人権・性を考える上で参考となり、一読の価値あり。

「女はすぐれている」 A・モンタギュー 中山善之訳

平凡社 1975年 1200円
男性の側からの発言による性差に関する思いこみを打ちこわす試み。専門の人類学・社会生物学的視点から性差の問題を論じる。

「女役割—一性支配の分析」 目黒依子 垣内出版 1980年

1600円
女性学とは何か、女性学とのかわりを出発点として性支配を分析し女役割を問いつす。

〔か・き・け〕

「家事労働」 大森和子, 伊藤セツ他 光生館 1981年
2500円
マルクス経済学における家事労働論。巻末に家事労働に
関する事項の年表(1868~1978)が付記されている。ユ
ニークな生活史的年表である。

「資本制と家事労働—マルクス主義フェミニズムの問題
構制」 上野千鶴子 海鳴社(モナド・ブックス)
1985年1月 500円
家事労働を理論的にとらえ, 家父長制と資本制による二
重の女性支配の構造を明らかにする。再生産(家事労働
の中で大きなウェイトを占める子育て)の問題がマルク
ス主義フェミニズムによって理論化されたダイナミック
な試論。

「教会と第二の性」 メアリー・デイリー 岩田澄江訳
未来社 1981年 1500円
第15号の最新刊案内 p. 10 をご覧下さい。

「経済セックスとジェンダー—シリーズ プラグを抜く
①」 山本哲士編 新評論 1983年 1500円
性差別の根拠をさぐる—日本における近代化と儒教イデ
オロギーについての覚え書き(青木やよひ), パナキユ
ー・ジェンダー(イバン・イリイチ)。この<プラグを抜
く>シリーズは産業文明の見直し, 新しいライフ・スタ
イルの模索するシリーズ。「フェミニズムの宇宙」をご
参照下さい。

「現代婦人論入門」 伊藤セツ 白石書店 1985年2月
1600円
1970年代以後のベーベル「婦人論」など社会主義婦人論
への批判に対して, クララ・ツェトキンをはじめ科学的
婦人論の研究者である著者がフェミニズム, 家事労働論,
主婦論争を分析, 批判し伝統的社会主義婦人論を展開す
る。

「言語と性—英語における女の地位」 ロビン・レイコフ
かつえ・あきば・れいのるず, 川瀬裕子訳 有信堂
1985年7月 1600円
フェミニスト言語学者ロビン・レイコフは英語にみられ
る「女らしい話し方」として社会が容認している表現形
態を分析。第一部 言語と社会—女の地位 第二部 女
はなぜレディでなければならないか など言語とフェミ
ニズムの問題を考える手がかりになり興味深い。

「言語と性—文化記号論の試み」 ピエール・ギャー
中村栄子訳 白水社 1982年 2800円
言語と記号が文化にもたらす背景を解読し, 男性の女性
に対する優位を確立するために築きあげられた, 父権原
理にもとづく思考と制度への反省をうながし, 文化記号
論の新しい視野を切り開く。

〔し・せ〕

「資本主義・家族・個人生活」 エリ・ザレツキ
グループ7221訳 亜紀書房 1980年 1500円
S・ファイアストーン「性の弁証法」の評論し, マル
クス主義の立場からフェミニズムをとらえる。マルク
ス主義がそれまで論じなかった家族・個人生活を追求す
る。

「主婦論争を読む I・II」 上野千鶴子編 勁草書房
1982年 各1900円
1955年に石垣綾子の<主婦第二職業論>にはじまる30年
にわたる諸家の主婦論争が二冊にまとめられている。職
場進出論, 性別役割分業論, 家事労働論, 主婦解放論へ
と展開される主婦論争のプロセスが把握できる。編者の
上野自身の主婦論もものべられている。上野によって解読
される主婦論争の問題点は興味深い。

「ジェンダー—女と男の世界」 イヴァン・イリイチ
玉野井芳郎訳 岩波書店 1984年 1900円
「シャドウ・ワーク」で現代産業文明に対して鋭い批判
をしたイリイチが, 産業社会が形成されて以来男女の労
働は単一尺度で計られるようになり, <ジェンダー>は
崩壊した。前産業社会では文化は異っても, 地域に根ざ
した男女の差異<ヴァナキラー・ジェンダー>が存在し
た。性差を無視した<経済セックス>の支配を批判し,
ジェンダー賛美を行なう。このジェンダー論は議論を呼
んでいる。

「シャドウ・ワーカー—生活のあり方を問う」
イヴァン・イリイチ 玉野井芳郎, 栗原 彬訳
岩波書店(現代選書) 1982年 1700円
生活に必要な支払われない労働<シャドウ・ワーク>を
検討し, シャドウ・ワークの評価を提唱し, なぜ産業社
会ではシャドウ・ワークの隔離体制が存在するかを考
える。本書はさまざまな議論を呼んだ。性別役割分業を固
定化したままのシャドウ・ワークの評価には批判がある。

「女性解放思想史」 水田珠枝 筑摩書房 1979年
2900円
18世紀から19世紀にかけての世界の女性解放思想をたど
りつつ, 性差別の原因を性別役割分業に求め, その克服
なくしては女性解放はないと論じた画期的な力作。これ
が発表されたとき, この新しいフェミニズムは注目を集
め, 未だに本書はフェミニズムの理論として示唆にとむ。

「女性解放思想の歩み」 水田珠枝 岩波書店(新書)
1973年 430円
女性の従属の歴史はどのようにして, 何に起因するか,
ルネッサンスから現代までの女性解放思想の歴史をまと
めたもの。「女性史は成立するか」の序章は興味深い。

「女性解放とキリスト教」 キャロル・クライスト編
奥田暁子, 岩田澄江訳 新教出版社 1982年 2200円
キリスト教徒として生きることとフェミニストであるこ
とは相容れないことであろうか?キリスト教の中にある
性差別を追求し, 全人的な人間解放に至る道を創り出
そうとしているアメリカのフェミニストの論文集。

「女性解放と現代—マルクス主義女性論入門」
大原美紀子 三一書房 1972年 580円
ウーマン・リブの運動から受けた衝撃を出発点としてあ
くまでもマルクス主義の立場から, これまでのウーマン
・リブの誤謬と限界をえぐり出し, 真の解放の道を明ら
かにする。

「女性解放へ—社会主義婦人運動論」 山川菊栄
日本婦人会議 1977年 1500円
山川菊栄の婦人論を集録。「今日, 女性を苦しめている
ものは, もはや封建的慣習ではなくて, むき出しの資本
主義の圧力である」として日本婦人会議のサブテキスト
として編集されたもの。I 社会主義運動と婦人の問題。
II 婦人労働問題。III 母性保護論争。

「女性原理と写真」宮迫千鶴 国文社 1984年 2500円
 ジーン・シンガーの「男女両性具有」に導かれて、写真における男性原理と女性原理を考える。

「女性・その性の神話」 青木やよひ
 オリジン出版センター 1982年 1600円
 ウーマン・リブはなぜおこったか？男と女の関わりはどうなってゆくのか？文化人類学的視点を取りこんだ女性論。

「女性とは何か 上 身体編—科学的発見」
 E・シュルロ、O・チボー編 西川祐子、天羽さき子、
 宇野賀津子訳 人文書院 1983年 3800円
 遺伝学的・ホルモンの科学的・生物学的観点から女性とは何かを考える。1976年パリで開催された学際的シンポジウム“女性であること”の報告と討論を編者の解説つきで収録。ジョン・マネー、エレノア・マッコピイ他、多彩な顔ぶれ。

「女性とは何か 下 心理・社会学編—新しい女性学」
 4200円
 性自認・役割の問題を心理学的・社会的観点からみる。

「女性の権利の擁護」メアリー・ウルストンクラフト
 白井堯子訳 未来社 1980年 3500円
 18世紀という因襲に満ちた時代において人間の権利の問題を女性の問題として発展させた女性解放思想の古典を翻訳した労作。メアリー・ウルストンクラフト(1759~1797)

「女子労働論—機会の平等から結果の平等へ」
 竹中恵美子編 有斐閣選書 1983年 1700円
 性差別の根源ともいべき性別役割分担システムの克服、生命の再生産・家事労働を社会的価値体系から排除している資本主義的現代社会を問い直す。第2次大戦後の女子労働の進出と拡がりの中で、女性解放思想の視点で書かれた女子労働理論の力作。資本制と家事労働・女子労働に関する論文多数。

「性差—その起源と役割」 E・マッコピイ編著
 青木やよひ他訳 家政教育社 1979年 1800円
 性ホルモンの働きと男女差に与える影響、知的能力における性差、子どもが男女の性別役割を身につけるのは社会学習の結果なのか、あるいは環境に関係なくもって生まれたものなのか興味深いテーマを文化人類学の立場から7人の学者が性差を論じる。

「性差の文化—比較論の試み」 青木やよひ 金子書房
 1982年 1600円
 男らしさ・女らしさの根拠は何かを性差の文化の視点でとらえた興味深い内容。文化の中の性差を考えるうえで、多くの示唆に富んだ本。<女らしく>生きるとは？と題された章はおもしろい。一読をおすすめする。

「性の政治学」 ケイト・ミレット 藤枝滯子他訳
 ドメス出版 1985年2月 4800円
 1970年にアメリカで出版されたとき一躍ベストセラーになり、以来今日も米国の女性の女性解放運動の<聖書>として広く読まれている本。この訳書は長らく絶版になっていたがこのたび再版された。

「性の署名」 J・マネー、P・タッカー 朝山新一訳
 人文書院 1979年 1500円
 女性問題の主要な論点<らしさ>を考えるうえで参考となる本。文化が造りあげた<らしさ>とは？何があなたを男あるいは女にしているのか解き明かす。

「性の深層」アリス・シュヴァルツァー 寺崎あき子訳
 亜紀書房 1979年 1500円
 著者は西ドイツのフェミニスト・ジャーナリスト。西ドイツの14人の女性の聞き書きによって女の抑圧の仮面をはがし自立への第一歩を示唆する。“本書に無関心でいられる女は一人もいない。だれもが本書の中に自分自身の姿をみいだすだろう”とのべている。

「性の弁証法—女性解放革命の場合」 評論社
 S・フェイアストーン 林 弘子訳 1972年 1500円
 歴史を通じての男性と女性の力の相関関係があらゆる階級の発達的基础となり文化史の流れを決定している。性の区分そのものが自然界における最も深い差別であり、常に女性と子供を抑圧してきた。テクノロジーが進歩するにつれて男女間の差異は重要でなくなるだろうという。著者はラディカル・フェミニズムの旗手であり、きわめて論理的な性革命理論が展開されている。資料として一読をおすすめする。

「性別役割—その形成と発達」 J・ブルックス ガン
 W・シェンプ・マチュウズ 遠藤由美訳 家政教育社
 1982年 3000円
 性別役割と性差との関係は？子供の成長を5段階に分け、性別役割と性差を検討する。

〔た・ち・つ・と〕

「第二の性その後—ボーヴォワール対談集 1972~82」
 福井美津子訳 青山館 1985年6月 最新刊 1200円
 1972~82まで西独のジャーナリスト、アリス・シュヴァルツァー(著書「性の深層」)を相手に対談。フェミニズムの諸問題、サルトルとの共同生活、老いについて語る。サルトル亡きあとのボーヴォワールの最新発言集。本書は1984年パリで出版された。

「男女両性具有 I—性意識の新しい理論を求めて」
 J・シンガー 藤瀬恭子訳 人文書院 1981年 2000円
 著者はユング派の女性心理学者。個人の内面の女性性と男性性=心理的男女両性具有を発見。他方の性の従属にもとづく旧来の諸理論は社会の不均衡を招く。ギリシア神話・プラトン哲学・旧約聖書などの文献から、その男女両性具有と宇宙の全体性とのかわりを探る。

「男女両性具有 II—性意識の新しい理論を求めて」
 1700円
 太極拳・大脳生理・システム論などの中から男女両性具有なるものを探る。

「超少女へ」 宮迫千鶴 北新社 1984年 980円
 少女文学の古典と今日的少女文学を解説し、著者の女性論を展開。著者が創造した<超少女>とは？本号 書評をご参照下さい。

「対幻想—n個の性をめぐって」 吉本隆明 春秋社
 1985年1月 1400円
 芹沢俊介のインタビューにより、吉本隆明の性・家族・フェミニズム論が展開される。

「何処にいようと・りぶりあん」 田中美津 社会評論社
 1983年 1600円
 70年代の日本のリブ運動の旗手の第二作。「いのちの女たちへ—とり乱しのウーマン・リブ論」をご参照下さい。

〔に・は・ひ〕

「入門女性解放論」一番ヶ瀬康子編 亜紀書房 1975年
1800円

ウルストンクラフト, J・S・ミルの女権思想, マルクス, エンゲルスの女性解放思想, エレン, ケイの母性主義, らいてう, 晶子の母性保護論争など内外の女性解放論を解説。

「母親と日本人」 佐々木孝次 文芸春秋 1984年
1300円

父親・母親のあり方から日本文化の本質を考える。男が精神的に女性に対する依存を断つこと。日本の男にとって女性とは本質的に母親の代名詞だから、その意味でマン・リブが必要という。

「平塚らいてう著作集 2—母性の主張について」
大月書店 1983年 3000円

与謝野晶子との母性保護論争の論文を収録。

〔ふ・へ・ほ〕

「藤の衣に麻の袷」 富岡多恵子 中央公論社 1984年
980円

女性作家の著者がフェミニズムを語る。性の非日常性, 主婦解体の戦略, など女の問題を文明全体の行くえを視野に入れて新しい時代の男女・家族のあり方を考える好エッセイ。

「婦人論 上・下」 ベーベル 草間平作訳 岩波書店
1981年改版 上500円 下400円
未来は社会主義のものである。いいかえれば何よりもまず労働者と婦人のものであると結ばれる 婦人論・社会主義入門の古典的名著。

「フェミニスト サイコロジー—女性学的心理学批判」
しまようこ 垣内出版 1985年4月 2600円
女性学的視点から心理学を見直す試み。歴史的に内包してきた心理学の未踏の課題である“心理学を生活世界を生きる人間の学”に近づけるために、性差心理学批判を試みた興味深い内容。

「フェミニズムの宇宙—シリーズ プラグを抜く③」
青木やよび編 新評論 1983年 1800円
女性性と身体のエコロジー (青木やよび) —身体性を軸にした女性論への新たな試み, エコ・フェミ運動 (デンマークからのメッセージ), フェミニズム論争でそのゆくえが注目されているエコロジカル・フェミニズムの理論を集録。

「フェミニズムの歴史」 ブノワット・グルー
山口昌子訳 白水社 1982年 1400円
黎明期のフェミニズムを紹介し, <フェミニズムは女嫌いから生まれた>と皮肉とユーモアを混ぜて分析したユニークな女性解放思想史。グルーはフランスのフェミニスト。グルーの「最後の植民地」は有吉佐和子訳で邦訳されて話題になったが絶版である。

上野千鶴子の おんなの本・USA

(連載第4回)

バーバラ・マクドナルド

「私の目を見てごらん」

セクシズム sexism (性差別) ということばは知っているが, エイジズム ageism (高齢者差別) ということばは初めて聞いた。今年6月, シアトルの全米女性学会でのことだ。71才になる銀髪の婦人が, 壇上が上がって力強いスピーチを始めた。「あなた方若い女性はセクシズムと斗っているが, 自分たちの隠れたエイジズムに気づいていない。あなた方は男と同じ眼で私たちを見ている——かつては女だったかも知れないが, 今は女を廃業した存在として。」

それがバーバラ・マクドナルド, 「私の目を見てごらん」[Barbara MacDonald, 1983, *Look Me in the Eye, Spinsters Ink.*]の著者だった。「あなた方若い女性は私たち老齡の女性を, あわれみ, さげすみ, ステレオタイプで見, いたわるとかと思えば, その一方で, 甘え, 寛大さを求め, 敬遠する。私たちはあなた方の祖母でもなければ母でもない。私たちはただあなた方に, 対等な個人として扱われることを要求しているだけだ。」

彼女の断固としたスピーチは, 鮮烈でショッキングだった。そこには「女らしさ」のステレオタイプから必死で逃がれてきて, 今度は「年寄りらしさ」のステレオタイプと断固として斗っている老フェミニストの姿があった。彼女はたたみかける。

「あなた方若い者は, 老人を搾取している。口述のライフヒストリーをとりに来るが, 私たちの過去に関心

を払っても私たちの現在に関心を払おうとしない。」

それは私自身

がやっていたことでもあったので, 虚を衝かれた思いだった。私はこれまで, 老女性がこれだけ明快に, 主体としての自己主張をしたのを聞いたことがない。私たちは年上の女性を「おばあちゃん」のカテゴリーに放りこんで, 安心してはいなかったか。

「私の目を見てごらん」は, バーバラと彼女のレズビアンパートナー, シンシアとの共著による, 彼女の「老後体験」とエイジズムに対する真摯な告発の書である。

「老人問題」と「老後問題」ははっきり位相がちがう。「老人問題」は, 老人を, 介護を要する厄介な対象として, つまり「客体」として取り扱うが「老後問題」は, すべての個人がいずれは直面する実存的な経験として, つまり「主体」の立場から, 老後と死とを扱う。こういう本を読むと, 年とって死ぬまでいっばいやることあるから, 忙しくてフェミニストをやめていられない, と元気が出てくる。バーバラの本は, 私たちにそういう勇気を与える本だ。



「ほんとうの女性らしさとは一男のためのウーマンズ・リブ」 ジーン・マリオン 道下匡子訳 朝日新聞社 1975年 1600円
男性フェミニストによってかかれた女性論。抑圧者に仕立てられている男もまた被害者だと説く。一読の価値あり。

〔ま・み・め〕

「魔女の論理」 駒尺喜美 不二出版 1984年(増補改訂版) 1500円
結婚制度の本質を解明し、高村光太郎・鷗外・漱石・吉屋信子などの文学をまったく新しい視点で読む女性論。著者はフェミニズムの視点で日本文学を読んだ先駆者。多くの人に目のウロコが落ちるほどといわしめた話題作。

「マルクス主義フェミニズムの挑戦」 A・クーン, A・ウォルフ編 上野, 住沢, 矢木他 共訳 勁草書房 1983年 2400円
女性解放理論の新しい潮流であるマルクス主義フェミニズムとは? フェミニズムと唯物論, 家事労働とマルクスの価値理論, 女性と性と階級など興味深い論文によってフェミニスト理論が構築されている。社会主義婦人解放論批判とラジカルフェミニズムの限界がのべられている。

「ミル『女性の解放』を読む」 水田珠枝 岩波書店 1984年 1900円
1869年ジョン・スチュアート・ミルによって書かれた「女性の解放」を解説。女性論の古典としての意義を評価し、イギリス婦人参政権運動に強い影響を与えた女性解放理論に、人権思想をみることで上野千鶴子の貴重な文献という。

〔や・わ〕

「山川菊栄集 1一女の立場から 1916~1919」 岩波書店 1981年 2700円
母性保護と経済的独立一与謝野・平塚二氏の論争を収録。

「私の女性論一性的役割分業の克服」 竹中恵美子 啓文社 1985年 980円
経済学者である著者の女性論の論文・エッセイをまとめたもの。『資本主義と家事労働』は家事労働論として参考になる。

〔資料・雑誌〕

「日本婦人問題資料集成 10一近代日本婦人問題年表」 丸岡秀子, 山口美代子編・解説 ドメス出版 1980年 8000円

近代日本の女性の生活と運動・思想の変容が正確に捉えられた労作。本書を女性問題を考える上で、必携の書とするひとが多い。編者・出版者の労がしのばれる貴重な年表。

「資料 母性保護論争一論争シリーズ」 香山信子編・解説 ドメス出版 1984年10月 3500円
晶子・らいてう・菊栄・山田わか等によって展開された論争の基本文献を収録し、編者の解説をつけてその全貌を明らかにする。

ジュリスト 増刊 総合特集 No. 39「特集一女性の現在と未来」 有斐閣 1985年6月 1700円
婦人の十年, 男女平等をめぐる, 女性解放, 女性論。対談 女と男の未来を拓くなど好論文多数, 戦後女性史略年表(1945~1985)を付記し参考になる。資料として手もとにおいておきたい一冊。

法学セミナー 増刊 総合特集 シリーズ30「特集 女性そして男性」 日本評論社 1985年7月 1300円
<てい談>これからの女性・男性, これだけは知っておきたい女性と法の基礎講座, 外国の女性と法(ASEAN, 西独・ソ連)

へるめす 創刊号 岩波書店 1984年12月 1400円
上野千鶴子一ジェンダーの文化人類学。

へるめす No. 3 岩波書店 1985年6月 1400円
宮迫千鶴一都市型社会のフェミニズム。

世界 '85・8月号「特集 女が変える」 岩波書店 1985年7月 620円
国連婦人の10年に合わせて特集された女性の戦後40年を考える好企画。シンポジウム一女たちのいま・未来は? 一家庭・労働・平和を考える。データにみる女性の戦後40年, 女性ジャーナリストの戦後史(増田れい子・下村満子), 対談 大江健三郎・津島佑子, 上野千鶴子論文。

現代思想 '85・1月号「特集 フェミニズム以後 女性原理を超えて」 青土社 1985年1月 880円
女っていうのは決してそんなものじゃない(J・クリステヴァへのインタビュー) 上野千鶴子一女は世界を救えるか? イリイチ「ジェンダー」論徹底批判を試みる。フェミニズムにおける<近代化>と<女性原理>の論点を明確にし、フェミニズムにおけるイリイチ論者に対して批判した論文。

現代思想 '85・4月号 青土社 1985年4月 880円
フェミニズムの未来一青木やよひ, ポーヴォワールの<産む性>を<雌の屈辱>とする前提に疑問をもち、上野千鶴子の「現代思想 '85・1」に掲載のイリイチ徹底批判論に反論。青木のエコロジカル・フェミニズム論を展開。「フェミニズムの宇宙」新評論刊もご参照下さい。

現代思想 '85・6月号「特集 家族のメタファー」 青土社 1985年6月 880円
対話<フェミニズムと家族の無意識>一吉本隆明と上野千鶴子, <近代家族>の誕生と終焉一落合恵美子, <永遠の子ども>と家族の神話一本田和子。

季刊 クライシス 20号 1984・夏「特集 女の鎖は世界をつなぐ」 社会評論社 1984年 980円
エコロジーとフェミニズム, シェドウ・ワーク論, 十年目のリブ運動, エンゲルス家族論の復権など論文多数。

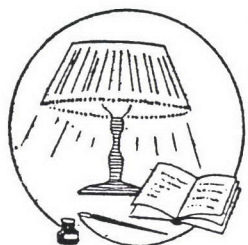
思想 '85・1月号 岩波書店 1985年1月 650円
住沢とし子一ブルジョア女性運動とナチズム(ボイマーの女性論を中心として)

女性学年報 No. 5 日本女性学研究会女性学年報編集委員会 1984年11月 800円
フェミニズム理論における「家内性」と「近代」, ジュリア・クリステヴァの視点一知の解体のためのフェミニスト的実践, 恋愛結婚イデオロギーと母性イデオロギー, 他論文多数。

婦人問題懇話会会報 No. 40 1984年6月 450円
イリイチ女性論への疑問(井上輝子), イリイチのジェンダー論のゆくえ(若井文恵), 産業社会の女と男(木下ユキエ)。

—女性のための—

最新刊案内

—1985年6月～
1985年8月及び
第15号未掲載分—

〔性・からだ・心理〕

「お産と出会う」 吉村典子 勁草書房 1985年3月
2200円

いいお産とは何だろう。産ませる側ばかりの発想が先行している現在のお産状況に疑問をもった著者は、産む側の女性のこころの問題を中心に、文化人類学的視点を混じえて、瀬戸内海の三島のお産の歴史や、現在のお産のあり方について調査研究したユニークな本。

「出産の文化人類学—儀礼と産婆」 松岡悦子
海鳴社(モノド・ブックス) 1985年7月 500円

妊娠・出産のあり方が文化と密接なかかわりをもっていることを、病院分娩や未開社会の出産儀礼を例にとり考察。お産婆さんからの聞き書きにより、〈産みの思想〉を紹介し、産む意味を考え、今後の分娩のあり方を展望。

「産み方は自分で決めよう—ラマーズ法を考える」

「お産の教室」編 第三書館 1985年6月 1200円
東京・中野で行なわれている〈お産の教室〉は病院出産を含めた自然分娩への道案内の活動をしている。お産の体験者から未体験者へのメッセージが77例。妊産婦体操、よくわかる呼吸法、母乳を出すための体操を図解。

「なみだの選沢—ドキュメント優生保護法」 谷合規子
潮出版社 1983年5月 1300円

優生保護法改「正」論議の発端とは？徳川の貧しい女たちの状況、刑法墮胎罪とは？ナチス・ドイツの断種法、優生保護法成立の背景。1972年優生保護法改正案をめぐる論議。改「正」派・生長の家とは？中絶法が緩和されていく世界の情勢、中絶をとりまく女の周辺など中絶に関する資料として有効な本。

「女性の心の成熟」 玉谷直実 創元社 1985年8月
1200円

ユング心理療法の著者が女性の内面的な成熟に目を向けた本。

「ほくどこからきたの？」 ピーター・メイル

谷川俊太郎訳 河出書房新社 1974年 1800円
〈あるがままのいのちのはなし。ごまかしはなし、さしえつき〉という紹介文が示す通り、セックスを子どもたちにごまかさず教えている。ロンドンで作られた爽いきいきした文章で率直でユーモラス。

※少し古い本ですが、幼ない子どもとともに読みたい本なのでとり上げました。

〔女性史・評伝・自伝〕

「祖母・母・娘の時代」 鹿野政直 堀場清子

岩波書店(ジュニア新書) 1985年6月 650円
明治維新から今日までの日本の女性の足跡をたどりながら、女性のもつ問題点を検討する。生活と問題・運動の三点をとらえ、若い世代に向けて書かれたていねいで著者の思い入れの深い本。本書のような女性史を娘たちに読ませたいと思う。

「女のくせに—草分けの女性新聞記者たち」 江刺昭子

文化出版局 1985年6月 1300円
明治から大正にかけてのジャーナリズムの草分け時代に新聞記者に挑戦した女たちの軌跡をたどる。現在でも女性記者の比率は1.05%と少数派。1890年に国民新聞に入社した最初の女性記者、子連れ取材をした磯村春子、ペンに命をかけた菅野すが、記者から運動家へ転進していた市川房枝など。性差別のきびしかった時代に情熱と行動力と叡知をもって行動した女性ジャーナリストたち。

「賞書 戦後の市川房枝」 児玉勝子編 新宿書房

1985年6月 2200円
未完のまま逝った市川房枝の自伝戦後編。理想選挙の灯をともしつづけた市川房枝の戦後の軌跡。これはひとりの女性の戦後史であるとともに政治史でもある。

「信濃路の出会い—婦選運動覚え書」 児玉勝子

ドメス出版 1985年4月 1400円
信州婦人夏期大学(大正13年)での市川房枝との出会い。婦選運動の最高揚期を過ぎ戦後は婦選会館を中心に活動している著者の自分史。

「婦人解放の道標—日本思想史にみるその系譜」

武田清子 ドメス出版 1985年7月 1400円
日本の思想史の展開過程において、婦人の問題がどうとらえられてきたかを、その重要な足跡を残した婦人解放思想と運動を考察。明六社同人の婦人解放思想、日本プロテスタントの女性観、差別と清水紫琴の移民学園、羽仁もと子の思想と生活合理化、相馬黒光、市川房枝など。

「続々 社会事業に生きた女性たち—その生涯としごと」

五味百合子編著 ドメス出版 1985年6月 2000円
M・H・コンウォール・リー、煙山八重、早川かい、大屋ムメ、三木達子他。

あざろ 「薊の花—富本一枝小伝」 高井 陽、折井美耶子

ドメス出版 1985年5月 1700円
富本一枝の娘が書いた母の思い出と折井の手になる一枝の小伝。青鞞時代の吉原登楼事件、南湖院のこと、奈良安堵村の富本憲吉との出会いと結婚。再び東京へなど。富本一枝のはじめての評伝。

「ふたつの文化のはざまから—大正デモクラシーを生きた女」

加藤シヅエ 船橋邦子訳 青山館 1985年7月
2000円

50年前に英文で書かれニューヨークで出版された加藤シヅエの自叙伝。当時はこの程度の婦人解放思想(産児調節運動サンガー女史に師事)でも発禁になる恐れがあったため、米国で出版。また1984年にスタンフォード大学より復刻され、本邦初の翻訳。著者は大正期の女性の性と人権尊重の先駆者。日本女性史の資料として一読をおすすめする。

「海路遥かに」胡 美芳 静山社 1985年6月 1500円
 戦中、戦後を時代の波に翻弄され日本と中国という二つの祖国を背負って歩みつづけた福音歌手胡 美芳の自伝。日中国交回復後30数年ぶりに上海に帰り生き別れになっていた肉親との再会を果たした。

「対なるエロス・高群逸枝一恋愛論・恋愛創生への試み」
 寺田 操 砂子屋書房 1983年12月 1800円

〔女性論〕

「講座 現代・女の一生②—卒業・就職」 岩波書店
 1985年6月 2400円

全8巻からなる女性問題全集。第一回配本の本書は女性が働く意味と現在の女性就労の問題点を多彩な執筆者が語る。就職ガイダンス(天野正子)、現代OL事情(青木雨彦)、人生と仕事(黒井千次)。比較的わかりやすく書かれ、女子学生向き。

「講座 現代・女の一生④—夫婦・家庭」 岩波書店
 1985年7月 2400円

20世紀もやがて終ろうとするいま、人類は夫婦と家庭のあり方について、再検討をせまられている。家族がゆらぎだした直接のきっかけは女性の生き方、価値観の変化であるとの前書きからはじまる。家族の過去・現在・未来(水田珠枝)、企業戦士と銃後の妻(斎藤茂男)、近代家族のうつり変わり(鹿野政直)他。

「女を装う」 駒尺喜美編 勁草書房 1985年4月
 1800円

女にかかわる美意識や装いについてどのようにして成立してきたのかを考える。男装・女装の区別もうすれははじめてい。生き方も服装も男女区分がなくなりつつある。女の顔、化粧、女のクツ、女の服装、女のズボン、コルセット、てん足、など女の装いの歴史と現在を考察。

「女性の二つの役割」A・ミュルダール、V・クライン
 大和チドリ、桑原洋子訳 ミネルヴァ書房 1985年6月
 2000円

家庭と仕事を両立させながら男女平等の道を探る。豊富な資料を駆使して働く女性の未来像を描く。ミュルダールは1982年度ノーベル平和賞受賞(国連の軍縮交渉)またV・クラインは「女とは何か」の著者(故人)。

「エヴァ・コンプレックス」 田中宏和 鳥影社
 1985年5月 1400円

エヴァ(真に女性的存在なるもの)に関して人類史、文化史、宗教史、女性史の面から考察。世界の根源は女性原理で動いている。未来を決定するのも楽園を再創造するのの一重にエヴァの両肩にかかっている。ここでいう女性原理とは?

「堺 利彦女性論集」 鈴木裕子編 三一書房
 1983年5月 7500円

堺 利彦は明治社会主義のなかで、家庭論、女性論を系統的に展開した稀有の人。日本女性解放思想史研究の文献として役立つ。

〔世界の女性〕

「希望のために闘う」 ベトラ・ケリー
 高尾利数、菊池悦朗他訳 春秋社 1985年7月 1600円
 西ドイツの緑の党のベトラ・ケリーが反核・エコロジー、非暴力、女性解放について語る日本初の講演、論文集。

「ベトラ・ケリー」 モニカ・シュベル 木村育世訳
 春秋社 1985年8月 1800円
 ベトラ・ケリーの半生を描く評伝。

「音楽史の中の女たち—なぜ女流作家は生まれなかったのか」
 エヴァ・リーガー 石井栄子、香川 檀、
 秦由紀子訳 思索社 1985年7月 2800円
 原題は「女性と音楽と男性支配」。著者は1940年ドイツ生まれのフェミニスト。今までになかったジャンルの女性論。ドイツの音楽活動、音楽史とヨーロッパのフェミニズム、性差別思想を担う音楽、女性の音楽活動の歴史(クララ・シューマン、コジマ・ワグナー、フェニー・ヘンゼン)。ソリスト、楽団員、指揮者など今日の女性音楽家の状況もとらえる。本号あなたの情報・私の情報を参照下さい。

「現代アメリカ文学の女性像」 小池美佐子
 原 恵理子編著 勁草書房 1985年4月 2200円
 10人の女性が語る現代アメリカ文学論。女性学的視点による文学論。ユージーン・オニール、テネシー・ウィリアムズ、トニ・モリスン、ジョン・アップダイク他。

「イギリス女性作家の深層」 久守和子 吉田幸子編著
 ミネルヴァ書房 1985年5月 2000円

6人の19世紀の女性作家と5人の現代女性作家を扱ったイギリス女性作家論。ジェイン・オースティン、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、ヴァージニア・ウルフ、マーガレット・ドラブル他。

「遥かなるバークレー彼女たちの60年代」
 サラ・デビッドソン 南川、宮崎、松葉訳
 河出書房新社 1984年7月 1800円

60年代のはじめにバークレー校に入学した3人の女子学生のその後の10年を追う。時代の波をうけて3人の女性はラディカルに変貌をとげていく。著者を通してみた社会史ともいえる。

「デンマーク日記—女性大使の覚え書」 高橋展子
 東京書籍 1985年5月 1200円

日本初の女性大使の見たデンマーク社会と女性が外交官になってわかったこと。

「オーストラリアからの手紙」 佐藤真知子 学陽書房
 1985年4月 980円

住んでみてわかった個性派教育とのびのびしたオーストラリアの生活。子どもの教育や主婦の眼を通してオーストラリアと日本の学校教育を比較。日本の管理教育のあり方に対して多くの示唆にとむ本。

「おばあちゃんのユタ日報」 上坂冬子 文芸春秋
 1985年7月 1000円

USAユタ州で60年余り日本語新聞を発行しつづけてきた89歳の女社長。太平洋戦争をどのように報道したか?

「フランスの親子・日本の親子」 有地 享
 NHKブックス 1981年 700円

〔家庭・家族〕

「家族の時代—ヨーロッパと日本」 木村尚三郎
 新潮社(選書) 1985年5月 780円

天下国家を論じるダイナミックな大議論は影をひそめ、代って家族の新たな結び合い、夫婦のあり方、親子のあり方の小議論がさかんになってきた。国民国家の時代から家族の時代へと時代は大きく折れ曲がりつつある。家族の問題をヨーロッパの歴史を通して考えた家族の社会史。

「家族という関係」 金城清子 岩波書房(新書)
1985年6月 430円
現代の家族問題を主として女性の視点から考える。家族の変遷を跡づけながらいま社会変化の中での家族のあり方を法制度を中心に考える。著者は「法女性学」の著者。

「家族・第三の転換期」 柚井孝子 亜紀書房
1985年7月 1500円
戦後日本の家族は、家制度の廃止と高度経済成長によって二度の転換期を迎えた。そして、いま家族は第三の転換期—高齢化社会の到来を迎える。家族の再編成を余儀なくされている今日の日本の家族問題が女性の自立と高齢化社会を中心にわかりやすく述べられている。これからの女性・家族のあり方を示唆する内容。

「ゆれろこく家族—地域は子どもをどう支えるか」
金田利子, 杉浦一枝他編 ミネルヴァ書房 1985年6月
2000円
静岡家族問題研究会のメンバーが執筆。家庭裁判所からの報告をもとに非行・離婚のケース・スタディー, 子どもをめぐる登校拒否, 家庭内暴力の問題などを精神医, ケースワーカーが地域全体で家族・子どもとどうかわるかを検討。

「家族生活とストレス」 石原邦雄 垣内出版
1985年6月 2800円
家族は一面でストレスの発生源であるが他方, 生活主体としてストレス刺激を受けとめ, これに対処していけるシステムであることに力点を置いた家族ストレス論を展開。

「家庭生活論—現代家庭の構造分析」
関谷, 魚住, 高島編 勁草書房 1985年5月 2800円
家庭生活とは何か。変動する社会のなかで, 現代の家庭生活(衣・食・住・育児・教育・家族関係・老人・女性)をトータルに捉える。

「離婚の社会学—アメリカ家族の研究を軸として」
野々山久也 日本評論社 1985年6月 2600円
アメリカの離婚問題の章で著者はくアメリカの経済発展は女性たちを労働市場に引き出すことによって女性たちの自己扶養能力を高めていくとともに, 結婚を生活していくための手段と見なすのではなく, むしろ結婚における夫婦の情緒や友愛が最も重要な要素になってきたと述べている。離婚に関する家族社会学の理論, 再婚率と再婚家族の研究の動向, アメリカの同棲問題。この分野でははじめての単行本。

「蒸発—妻の叛乱」 さとうまみ 評伝社 1985年6月
1300円
離婚という正式の手続きを踏まず, なぜだまって身をくらすのか。彼女らはどんな悩みをかかえ, なにからエスケープしようとしているのか。妻の蒸発の7事例。

〔子育て〕

「子供—10歳から15歳を中心に174人の子供たちが語る」スタジオ・アヌー編 晶文社 1985年7月 2900円
現在の子どもの声を集めた面白い企画の本。子どもたちが自分の悩み, よろこびを語るインタビュー集。この本を編集したスタッフの意気込みが伝わり, これは子供たちが語る大人のための本ともいえる。大人が失った子どもの世界。850頁にもなる大冊。

「子どもって不思議—学ぶことは生きること」
長谷川 孝 ウイ書房 1985年3月 1300円
教育ジャーナリストの著者が, 横浜の公立小学校の学級で行った授業の実践記録はユニーク。<まなぶ>とはどういうことなのか内省つづける著者の教育論は内申書裁判, 登校拒否, 受験戦争にも疑問を投げかける。

「子どもの情景」 秋山さと子 大和書房 1985年5月
1300円
ユング心理学からみた児童書。「指輪物語」「飛ぶ教室」「モモ」他児童文学は大人にとって新しい意味の哲学書であり, 人間について, 学問についての新しい見方を教えるものであるという。

「さよなら学校信仰—自前の教育を求めて」
わかる子をふやす会 八杉晴実編 一光社 1985年6月
1200円
<学校信仰>に浸っている大人社会に向けて子どもたちの身体ごとの叛乱が始まった—登校拒否, 勉強拒否。この小さな尖兵たちと日頃生活している現場の大人たち—小学校から逃亡した元教師, 夜間・定時制の教師, カウンセラー, 私塾人たちが子どもに代って代弁する。

「なんだ坂こんな坂—子どもの発達と家庭生活」
村越邦男, 村越洋子 大月書店 1985年4月 1200円
働きながら3人の子育てにとりくんでいる教育研究者夫婦が執筆。夫婦のこと, 同居の親のこと, 学校, PTA, 地域のことなど身近な問題の実践記録。

「親と子—アメリカ・ソ連・日本」 服部祥子
新潮社(選書) 1985年7月 830円
親と子のかかわりは旅のようなものである。親であり, 子である運命を味わい, 道づれとなって共に歩む旅である。母であり精神科医である著者が, 海外体験をおりませながら, 人間回復の親子論を展開する。

「子供たちはよはばたけ—障害児の未来にすべてをかけて」
洲上隆子 海声社 1985年7月 1000円
重い障害児をかかえながら<教育の場>と<地域福祉>をつくりあげた母親の実践記録。自分自身では何の主張もできない精薄と呼ばれる人たちの福祉は置きざりにされてきた。親たちが立ち上がらなくて, 誰がやってくれるだろう。

「子育て百科—誕生から思春期まで」
須藤敏昭, 田中孝彦他編 大月書店 1985年7月
4200円(今年度12月まで特価 3900円)

「男女共学家庭科を創る—中学校の実践から」 榎田真澄
学芸図書 1985年6月 1300円
女子教育として性格づくられた家庭科は男女共に必要な教科として確立されようとしている。著者の勤務校での全般的な男女共学の実践記録。

〔法律・労働〕

「イコール・ライツ」L・キャノウィッツ 藤井紀代子,
堀内光子訳 有斐閣(選書) 1985年6月 1600円
女性の解放は男性にとっても利益という視点で男性側から捉えた男女平等とは?本書はアメリカにおける男女平等を法制面から数多くの判例を通して考える。

「男女雇用機会均等法の労務—モデル例でわかる改革のすずめ方」荻原 勝 中央経済社 1985年5月 1200円
 来年(1986年)4月から施行される男女雇用機会均等法の手引書。法の内容と趣旨、募集・採用から退職までの対応。労務管理のあり方、女子社員の活性化のはかり方、男女同一賃金の原則の運用の仕方など。

「新・年金パスポート」 川村匡由 ミネルヴァ書房 1985年5月 1200円
 昭和61年年金大改正に備える年金情報。新旧年金制度をわかりやすく解説。

「はたらく女性の悩み110番」 はたらく婦人の連絡会編 学習の友社 1985年6月 1000円
 毎日新聞に「はたらく婦人の悩み110番」を執筆したメンバーが働く女性のために必要な情報をまとめる。いまから就職しようとする女子学生に、パートタイマーで働く女性に、そしてキャリア組のために、母性保護、雇用機会均等法、年金、保育所の遊び方などをQ&A式でわかりやすく解説。

「オトコ社会とつきあう法—キャリア・ウーマンの知恵袋」 菅原真理子 PHP 研究所 1985年8月 980円
 中央官庁のキャリア・ウーマンとして著作も多い著者が、オトコ社会で働く女性の新しい働き方(仕事も家庭も)を示唆する。著者は男性の働き方とは異なる女性独特のセオリーF論を駆使しながら、日本の社会状況と女性の働き方を考える新しいタイプのキャリア・ウーマン。米国キャリア・ウーマン最新事情も含まれている。

「女性研究者—あゆみと展望」 猿橋勝子、塩田庄兵衛編著 ドメス出版 1985年7月 1600円

戦後40年の間に女性の社会的地位が向上したといわれているが女性研究者の実態は？女性研究者の雇用の改善を求めた報告と問題提起。1985年度はじめて、日本学術会議に3名の女性研究者が選出された。

「働く女たち」 仲原晶子編 雪華社 1985年5月 1500円

戦後の女子の大学教育の草分け時代に学んだ女性たちが仕事を通じ、女が働くということが社会からどのようにとらえられたかを顧みる体験的女性論集。巻末の対談で作家三枝和子が“それからは女が男を捨てた時代だ、家庭内でも仕事の世界でもまだまだ男を甘やかすようになってきているので、女が自分を通して男を泣かす必要は充分ある”といっているのが面白い。

「女・仕事」 井上理津子編著 長征社 1985年6月 1500円

明治生まれから戦後生まれまで、働く女性92人にインタビュー。ここに登場する女性たちは、あたりまえに仕事をし、普通に生きる女たちの物語である。

「レリアン成功物語—主婦が重役の椅子に座るとき」 守田柃路 商業界 1985年5月 1200円
 婦人服小売り業であるレリアンは全国に263店の直営チェーンを持ち社員数1200人のうち9割近い1063人が女性。5人もの女性重役を誕生させたという女性企業。

「女たちの挑戦—西武セゾングループ革命」 宮野 澄 講談社 1985年5月 1200円

女性の活性化に成功した西武セゾングループの斬新な人事・経営を調査。23人の女性の証言と女性パワー。“女が女であることをやめなければ能力を生かせない職場はおかしい”との提清二人事戦略。流通からセゾンへと新しい企画集団に変貌した西武セゾングループの企業の生き方を探る。

「かわいい女傑たち」 山崎英憲 かや書房 1985年7月 1000円

家庭を持ち、子育てをして、そのうえ生きがいを持って仕事に就いている10人の女性を描く。この取材を通して女性が安心して実社会で働くことができる社会づくりに男性自身が立ち上がらねばと著者は結論したというが、この本のタイトルがひっかかる。

「'86年版 女子学生就職ガイド」 日本生産性本部編 桜井陽子、菅原真理子他 日本生産性本部 1985年6月 980円

女性の就職とライフサイクル、OA化の進展と女性職場の変化、付録企業別61年採用計画。就職・職業選択に指針となるガイドブック。

「何かしたい主婦のために」 東海 BOC 可能性教室編 学陽書房 1985年6月 1100円
 “主婦の壁を破るセミナー”の記録。

「主婦からお店のオーナーへ」 グループ エス・アール編著 ユック舎 1985年4月 1200円

〔戦争と女〕

「女たちの8月15日」 小学館 1985年8月 1400円
 勤労動員、学童疎開、ヒロシマ・ナガサキ、引揚げ、戦後の窮乏などを21名の女性が綴る戦争とは？戦争をどうみるか？

「涙痕—オンナたちの戦争」 千田夏光 汐文社 1985年7月 1200円

戦争で深い心の傷を負った女性たち。戦争孤児。従軍看護婦、徒軍慰安婦、女の碑の会—独身婦人連盟、引揚げ者用の墮胎病院など戦争によって踏みつぶされた女たちの人生を描く。

「ヒロシマ母の記—史樹の死を生きて」 名越 操 汐文社 1985年6月 1300円

自らの被爆のみならず、15年後に誕生した史樹ちゃんをも原爆に奪われたヒロシマの母の記録。“わたしはいつも史樹を抱いてねた。いつかは再発するのだからもしもわたしのこの腕から史樹が近ってしまうなら、史樹を抱いて化石になりたい”と。

「戦争を拒む未来」 戦争と原爆を語り継ぐ共同出版委員会編 草莽社 1985年6月 1300円
 昨年京都で開催された丸木位里・丸木 俊「原爆の図」をみる会が機縁となって出版された戦争体験記。

「沖繩 祝い唄」 真尾悦子 筑摩書房 1985年7月
1200円

「いくさ世を生きて一沖繩戦の女たち」を著わして以来沖繩に通いつづけている著者が、沖繩の方言、暮らし、沖繩戦のことなど沖繩の人々との暖かい心の交流をつづる。

「戦争を生きた女たち一証言・国防婦人会」 梶谷美規子
ミネルヴァ書房 1985年8月 1700円
大阪府立婦人会館は、もと国防婦人会館であったという事実から、5年にわたる掘り起こし作業を通して戦時体制下の巨大な婦人団体一国防婦人会の実像を探る。

「七夕の願い海を越えて一三千三百枚の平和の短冊」
武田英子 ドメス出版 1985年7月 1300円
小学校の七夕行事にひとりの少女が短冊に平和の願いを書いた。この短冊に端を発した平和運動に全国から3300枚の短冊が寄せられて、1982年国連軍縮総会へいく代表団の女性に託されてニューヨークに行く。平和の短冊のドキュメント。

「銃後史ノート 復刊7号」 女たちの現在を問う会編
JCA 出版 1985年8月 2200円
過去の<銃後の女>の加害と被害の両方を検討している同会では敗戦直後の参政権、男女共学、民法改正等改革の意義を検討し戦後の出発点を確認。力作のつづいた「銃後史ノート」の終刊号。バックナンバーの在庫あり。

〔メディア・消費〕

「メディアに縛られた女」 キャスリン・ウェイベル
荒このみ訳 晶文社 1985年7月 1900円
小説・テレビ・映画・婦人雑誌・広告の5つのメディアにみられるアメリカの女性のイメージを探る興味深い本。大衆文化を創り出す産み方が圧倒的に男性に占められている限りは、男の論理に都合のよい女性像が描きつづけられる。創られた女性のイメージを分析した本書でアメリカ文化の影響を受けた戦後の日本の女性のイメージと比較してみるのも面白いだろう。

「広告コミュニケーション一広告現象を解説する」
ジリアン・ダイヤー 佐藤 毅訳 紀伊国屋書店
1985年6月 2500円

広告の具体的内容に則して、広告のメディア論、記号論、広告の効果、広告言語のレトリックを幅広く分析し、広告のイデオロギー（特に男女差別）の問題にまで触れる。

「買えますよ、『アメリカ』一女性輸入ミッションの成果」 日本貿易振興会編 学生社 1985年8月 1200円
女性ミッションに参加した女性バイヤーがアメリカで買いつけた品々とアメリカの生活。

「消費者教育の時代」 小木紀之 ドメス出版
1985年6月 1600円

日本で唯一の消費経済学科を担当し日本消費者教育学会に関わっている著者が現代社会と消費者問題、消費者運動、生協、消費者部門で働く女性像、企業とヒープ、アメリカの消費者教育などを考える。

〔エッセイ〕

「グロリア・スタイネム一新・生きかた論」
グロリア・スタイネム 道下匡子訳 三笠書房
1985年5月 1200円

グロリア・スタイネムは1934年生まれジャーナリスト。1963年にプレイボーイ・クラブにバニー・ガールとして潜入し、その鋭いルポで一躍有名になり、1972年「ミズ」を創刊。「ミズ」は世界150万の読者を持つ。6月に来日し話題になった。現在も女性運動のリーダーとして意欲的に活躍する著者のエッセイ集。プレイボーイ・クラブ潜入記、アリス・ウォーカーについて、もし男に月経があればなど興味深いエッセイ多数。

「風の道一編集者40年の思い出」 松本道子
ノラブックス 1985年7月 1200円
講談社の文芸図書の編集にたずさわった女性編集者が描く素顔の作家たち。文学の舞台の黒子として40年間接してきた作家たち。文学のよき読み手として黒子の役を果たした著者がふとした時の作家の姿を語る。

「みみずの井戸端会議」 高橋幸子 思想の科学社
1985年5月 1600円
表文化があるかぎり、人が生きているかぎり、井戸は埋められても声なき声として井戸端会議という裏文化はつづくだろう。密室となりやすい家にそよ風をさそい、孤立する心にドラマを呼ぶようなさまざまな泉をたたえた井戸端会議一著者は前著「みみずの学校」で注目された京都の団地に住む主婦。歯ざのよい文章のよって、日常生活がいきいきと描かれている。

「風は女から吹く一男は熱いうちに眠よ」 下重暁子
三笠書房 1985年5月 890円
男と女しかいないこの世の中で「いい男」が少なくなったとしたら、それは何より女にとって不幸なこと。男を育てることは女にとって必要不可欠である。

「春のソナター女が働きつづけるとき」 芹沢茂登子
労働旬報社 1985年6月 1200円
女学生るとき終戦、就職、再び大学へ入学。労音の仕事、結婚、出産、子育てと仕事、フリーライターとして<赤ちゃん110番>をスタートさせる。そしていま<熟年110番>を誕生させた著者の自分史。なぜ仕事をつづけてきたか、まわりの人々との出会いと連帯。戦後40年の女性の自分史に教えられるところが多い。

「女よ弦を鳴らせ一竹村泰子の国会奮闘記」 竹村泰子
亜紀書房 1985年5月 1600円
著者は1983年の総選挙で北海道一区から立候補しトップ当選したクリスチャン代議士。富士見産婦人科病院事件、児童扶養手当法、反核とYWCA、「支持政党なし」と政治を結ぶには。

「半満月など空にかかって」 三枝和子 福武書店
1985年2月 1400円
33歳の滞子が誰の子どもでもない子どもを産みたい女のロジックを求めていく姿を描いた連作小説。

「女のことは誌」 杉本つとむ 雄山閣出版 1985年6月
1500円
女のことは歴史を中心に女と言葉のかかわりを考える。諺に見る女、女に関する漢字、女ことばとは何か、女性解放と女のことはなど。

「綴方教室」 豊田正子 木鶏社 1984年9月 1600円
綴方教室の初版は昭和12年(中央公論社)より発行された。東京下町の職人一家の生活を鈴木三重吉が主導した綴方運動の流れをくむ教師の指導による少女豊田正子の作品を掲載、のちに「赤い鳥」に入選作を発表。本書は「綴方教室」の成立事情と小学生の豊田正子の成長過程も付記し復刻された。

「命よ燃えろ心よ光れ」 小曽根俊子 講談社
1985年4月 980円
著者は生後一週間で脳性マヒに。周囲の協力でささえられ高校を卒業。＜全国わたぼうし音楽祭＞で詩が入選。以後、障害にめげず、さわやかに生きる姿は多くの人々に勇気を与えた。車椅子の詩人の自分史。

〔資料・雑誌〕

「婦人白書 1985」日本婦人団体連合会編 ほるぷ出版
1985年7月 2000円
国連婦人の10年 日本の婦人はどこまで来たか(1976～1985)

「女性問題図書総目録 1985」
女性問題図書目録刊行会編 1985年4月 300円
女性問題図書を発行している出版社で組織された刊行会から出された(1984年創刊)書籍目録。項目ごとに分類されて解説つき。

〔品切・絶版のお知らせ〕

「変革期の女性」E・シュルロ 平凡社 品切
「女の由来」エレン・モーガン 二見書房 絶版
「女性論——性と社会主義」T・ミッチェル 合同出版 絶版
「中国女性史」小野和子 平凡社 絶版
「アメリカ女性史」E・ホシノ・アルトバック 絶版
「あの人は帰って来なかった」岩波新書 品切
「私は家へ帰りたい」クリスティース・コランジュ
文化出版局 品切
「眠れない時代」リアン・ヘルマン サンリオ 品切

「婦人の現状と施策—国内行動計画第4回報告書」
総理府編 ぎょうせい 1985年4月 1900円

世界 8月号「特集 女が変わる」 岩波書店
1985年7月 620円
「世界」が国連婦人の10年目にあわせて企画したタイムリーな内容。戦後40年目の女性の動向が検証されている。タイトル＜女が変わる＞にみられるように、女性の主体的な動きが、戦後40年以後の日本の動向に大きな影響をもつという。充実した読後感がある。

ジュリスト 増刊 総合特集 No.39「特集 女性の現在と未来」
有斐閣 1985年6月 1700円
第一線の執筆陣が戦後40年の女性の歩みを検証し、現在の各分野での女性問題を網羅し未来を展望する充実した内容。資料としてぜひ手もとにおいておきたい本。

働くなかまのブックレット No.3
「働くなかまのブックレット」共同編集委員会
新地平社 1985年5月 400円
特集 指紋押なつ拒否—差別・分断・管理の外登法体制

ディア・ダブリュ Dear W' 創刊号 福昌堂
1985年7月創刊(月刊誌) 570円
ワーキングウーマンに役立つ情報と知識を満載した月刊誌。特集—求人情報総点検、筑紫哲也と女性エグゼクティブ座談会他。硬派の女性雑誌。毎月26日発売。

「福田英子」岩波新書 品切
「女性心理学」松村 康平 福村出版 品切
「北米女性作家選 女たちの同時代——①青い眼がほしい トニ・モリスン ⑤メリディアン アリス・ウォーカー」朝日新聞社 品切中

〔15号の訂正〕

「心はみえる人だよ」→「心はみえるんよ」 凱風社
「中国の女たち」ジュリア・クリステヴァ 価格訂正
2000円→2800円
「シングルス」F・シュライバー 1100円→1200円
「それいゆ3号」 1500円→600円

英文版ウィメンズブックス 発売中!!

英文版ウィメンズブックス No.1 が出来ました。日本語版創刊号～5号に掲載のミニコミの女たち、書評、あなたの情報・私の情報を英訳。日本の女性問題書籍の出版状況、内容の一端を海外に知らせるため、お役に立てたらと願っています。海外や在日外国人の方々にご紹介ください。

国内 一部 350円(送料70円)

海外 一部 US\$2.00(航空便送料 US\$2.00)

夏のブックフェア「著者とのひととき」

夏のブックフェアの初日、八月二十四日、大阪より深江誠子さんを迎えて、ウィメンズブックストア談話室「女のスペース」で著者と語りあう会をもった。

残暑のまだ厳しい日にもかかわらず、一番のりはオートバイで旅行中の福島からの男性会員、また東京、神奈川、浜松、三重など遠方からの参加者も多く、四十名を越える集まりとなり、熱気ムンムンの会場。差別問題にとりくんでいるカップル、婦人会館のスタッフ、ジャーナリスト、教員、学生、主婦などが自分の問題意識、活動状況を交流しあう場となった。今回の「訪問ウィメンズブックス」は、この集まりにお招きした深江誠子さんをレポートすることにした。

題名に経済学とあるため、一般書店ではどのコーナーに置くか困っているそう。言われてみればなるほど、この本は従来の経済学とは違うのだ。

深江さんは大学院で経済学を専攻したおかげで、感情におぼれやすい自分に歯止めをかけ、もの奥をみることでできるようになったと語る。ただし、研究者としておさまる気はないらしく、経験、行動を重んじる実践派。いま、大学講師をしながら、無気力な学生たちにかに彼女のかかっている運動を理解させ、動かしていくが苦勞しているそう。イベントや一緒に遊ぶことよって呼びかけているのだが、平和運動でさえ、就職にさしかえないか気にする学生たち。この道は遠い。

深江さんはこの本の終章で熱っぽく「<家族>について書いている。特に、戸籍問題にふれ「心の底から結婚差別をなくしたいと願っている。そう願うからこそ、私は結婚しない生き方を選びたい」と言っている。結婚届を出さず、そして二人の間に生まれた子どもが親が届を出さないからといって私生子扱いされるのはおかしいと父母の統柄に嫡出子か非嫡出子かを記載することを拒否した。しんどいことだけれど、しんどさを自分たちの子にも担ってもらおうとさっぱりといいきっている。



深江 誠子 さん

訪問ウィメンズブックス④

「女と男の経済学」の



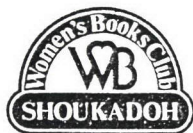
今の若い人は勉強すればするほど動こうとはしない。どうせこうなると最初から決めてかかっている不利益なことには動かない。「人生ってそんなものじゃないはず。どうなるかわからへんおもしろさがあるんちがうやろか? 経験を重ねていくおもしろさ、未知への好奇心、それが大切なんやないのかな。われわれには与えられているもんなんてもない。むしろ与えられなくされているんちがうかな」と深江さんの話はぐいぐいと人を魅きつけるところがある。「人を愛すること、恋愛至上主義かていいじゃない。徹底的にエゴイスティックになって国が何んといつてさよと、どうしてもゆずれないものを持つことが必要じゃない」と語りながら、いまの日本を変えていくのは女の方だと期待しているという。

他人や男性まかせにしているはひどいことになる。買春ツアーを許している妻は自己保身から家を守っているつもりなのかもしれないが、それが東南アジアの12、13歳の少女たちに売買をさせることとつながっていくことをもって知ってほしい。このあたりのことは本書にくわしく書かれている。ユニークな経済の本、ぜひ一読のほど。発見の多い本である。(明) 社会評論社刊

1600円

お待ちせ!! レターセット発売!!

ウィメンズブック友の会シンボルマーク入りのおしゃれな便せんと封筒ができました。手紙に、メモに、どんどんご利用ください。



B5版(182mm×257mm)ブルー地にマーク、横線入り便せん1冊封筒・5枚セットで400円 円240円 お申し込みお待ちしています!! 本と一緒にご注文頂くと送料が安くなります。

フェミニズムはどこへゆく
—女性原理とエコロジー—

日本女性学研究会'85.5シンポ企画集団編
青木やよびと上野千鶴子の邂逅・シンポ会場白熱の論議
9月10日発行 950円 円250円 松香堂刊

1986年ネットワーク手帖

ウィメンズブック友の会マーク入り
(便利な付録付き・女性グループ・ミニコミガイド)
予約受付 10月10日まで 予約価格750円 定価850円
送料 240円(本と同時に発送の時は安くなります)
上記二点ともお電話でのお申し込みも受け付けています。

《あなたの情報・私の情報》

女性民教審をささえて下さい

女性民教審事務局

高橋 雅子

4月8日、私たち女性有志で「女性による民間教育審議会（略称女性民教審）」を作りました。メンバーは俵萌子（代表）、樋口恵子、永畑道子、半田たつ子の各氏のほか、各分野から教育に深い関心を寄せている母親ばかり18名です。

いま、臨教審では、急ピッチで教育改革の審議が進められています。が、6月26日の第一次答申にみられるように、さまざまな問題に悩む子ども、父母、教師の声が吸い上げられていません。私達が4月に行った教育110番についてはニュースなどでご承知と思いますが、3日間で全国から約300本の電話による訴えがあり、その後も手紙、電話が続いています。又、月2回の審議会のうちの1回は公開で行い、予想をこえる数の傍聴者との対話を重ねています。

このように私達は、現場の生の声を可能な限り丁寧に聞き、臨教審に対しても、またひろく国民に対しても具体的な提言を行い、よりよい教育改革の実現を期していきたいと考えております。

あなたの声を教育改革に生かし、あなたと共に提言していくために、どうかこの会の賛同者となって下さい。お電話頂ければ資料をお送り致します。どうぞご連絡下さい。

事務局 東京都新宿区市谷加賀町2-5-23
グループわいふ内 女性民教審
TEL 03-268-7958
又は松香堂まで
TEL 075-441-6905

貴女の平和へのメッセージをどうぞ

—平和のための反核・反戦絵ハガキ運動

藤本 フミ子

朝日新聞家庭面「ひととき」欄掲載者が任意に集って「ひととき会」を作っています。

書く事で始った会の性格を生かして、一人一人の反核・反戦の思いを多くの方々へ送る目的から「平和のための反核・反戦絵ハガキ」を作りました。

制作過程で痛感したのは、戦争体験者から戦後世代への戦争体験の継承のむずかしさでした。討議を重ねながらの作業そのものが運動でもありました。

「残酷でなく、部屋にでも飾れるもの」と「戦争そのものを見据えた記録性の高いもの」と二分する意見の調整で、六枚組と八枚組とを制作しました。資金集めが目的でなく、各個人のメッセージを内外の知人、友人へ——の運動です。

有志の方々の御利用をお願いします。

6枚1組(300円) 8枚1組(380円)

送料1組 70円 10組以上まとめて下さいましたら送料は無料です。

事務局 〒577 東大阪市小阪1-5-12 TEL06-787-5430
藤本フミ子方

郵便振替番号 大阪3-6545

加入者名称 平和のための反核・反戦絵ハガキ運動事務局

お申し込み先 事務局 又は松香堂へ

ユニークな女性論「音楽史の中の女たち」

エヴァ・リーガー著 思索社刊

香川 檀

みなさん、こんな思い出ありませんか？小学校の音楽室で、壁に貼られた人物画——バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン——みんな男ばかり。ヘンデルは髪も長いし「音楽の母」なんていうから、てっきり女性かと思ったらやっぱり男。大人になるうち、いつのまにかそんな事実が「常識」のようになっていました。ところが、ドイツ雑誌の書籍案内でふと目にとまった『女性、音楽、そして男性支配』という本が、その常識にゆさぶりをかけてくれたのです。

これを書いたのは、エヴァ・リーガーというドイツの女性音楽学者です。女史はこれの中で、音楽、ひいては芸術の分野において、なぜ女性が「讃美される対象とはなっても「創造の主体」となれなかったのか、さまざまな事例に照らして考察し、それは決して女性の能力不足によるものではない、と看破しています。またその中の一章、「男性と音楽とのほざまで葛藤する創造的女性たち」では、クララ・シューマンやコジマ・ワーグナーらの日記をもとに、彼女たちが男との愛憎ドラマと自分の音楽活動との板ばさみに苦しむ姿が、鮮やかに浮き彫りにされています。さっそく友人たちと三人がかりで訳出にとりかかり、このたび思索社から『音楽史の中の女たち なぜ女流作曲家は生まれなかったのか』というタイトルで刊行されました。興味のあるかた、ぜひ一読を！
〒336 埼玉県浦和市東高砂町30-18 福島方(10月より)

同志社大学公開講座では

「女と男の女性論」を自費出版しました

女だけの女性論ではなく、女と男の女性論にしたい。どうすれば、女と男の女性論になるのか。これが私たち、同志社大学宗教部公開講座「女性論」に集まった者が、一年間の勉強を通してこだわり続けた課題でした。女性問題の性質上、痛みに耐えかねて声をあげるのはいつも女たちです。だがその叫びは男にとどかない。女を差別することが結局自分の首を絞めていることに、男は気づかない。女性問題は女と男の問題であり、女と男が性別を越え、手を取り合うことで、初めて解決しうる。お互いが理解し、協力し合っただけでなく、今ある性差別と闘っていきたい。そんな願いを込めて、この冊子を自費出版しました。

教育・性差など各自の研究をまとめた、硬軟とりどりの楽しく真面目な一冊(500円)です。是非御一読下さい。また毎週火曜日10時40分～12時10分、同志社大学宗教センターで講座を行っています。(無料。後期は9月10日より)是非御参加下さい。

連絡先 535 大阪市旭区4-20-29 金谷研究室

TEL06-952-9430

冊子は松香堂にもおいています。

連
載

ミニコミの女たち

第13回

自己紹介

1948年生。大学職員。
実験室で、学生相手の雑事に追われているが、賃労働以外は、自由な空間と時間が保証されている、ひとりぐらし。女性論の話題作をめくり、世の中の動きに驚いたり怒ったり(喜ぶことの少ないのが残念)、時々カナズチで頭をたたきながら自分の考えを整理してみたりで1日が過ぎる。



〈現在〉

女性問題研究会の

鈴木陽子

「雇用均等法」が国会を通過した。この間、望ましい「男女平等法」を求めて集会や国会傍聴に参加しながら、感じた無力感は何なのか？

政府・雇用者側の悪辣さに怒るのは勿論だが、世の女性たちの、何という関心の薄さよ。そして、それに輪をかけた男性の“ほとんど無関心ノ”欧米諸国と我が国との男女平等達成度の驚くべきギャップにもかかわらず、女性達の運動の盛り上りのなさは、これからの女性解放運動の道を象徴しているようで、暗たんとした気分になる。

世の中が右旋回していく中で、女性解放の視点もゆれている。近代の成果を疑い、歴史の針を戻そうという考えも出てきた。家庭の再評価や女性の特性論が再び登場しはじめている。一体、女性にとって、人間にとって本当に望ましいものは何なのか？幾度も問い直された課題をさらに模索し、女性解放の確固たる視点を求めて歩んでゆかねばと思う。

埼玉大学教員、安川寿之輔氏の下で「女性問題研究会」を作って、今年で11年。

現在は、毎月第3土曜日の午後、東京都婦人情報センターで例会を開いている。

会員数は現在約30名。20代から50代まで、年令も職業もさまざまな人間(勿論、男性もいます)が雑居して、何やら毎月やっている、というところ。女性論をあらゆる角度から検討するのを、一応の目的としている。

例会では、会員が、それぞれもっているテーマについて発表するのが基本だが、それと並行して年間テーマを設け、学習会も行っている。昨年は「男女平等法」について分担して調べた。今年は、女性論それぞれの分野の第一人者であろう竹中恵美子氏・水田珠枝氏の著作を中

心に勉強した。9月にお2人を囲んで集会を企画しているので、8月合宿で仕上げをする予定。

研究会機関誌「現在」は、大学の後輩達で作っていたのを引きついで、今年で10号になる(年末刊行予定)。

内容は主に、毎月の例会での発表をまとめてきた。外部からの投稿もある。海外文献の翻訳も常時載せるよう務めている。「女性論文献案内」の抜き刷り(300円)は、好評なようでうれしい。今年は10号目なので、特に充実した内容にしたいと考えている。

以前は<電話帳>といわれるほどのページ数を誇ったが、近年はページ数を少なくして、精神的負担を少なくしたつもり。内容は総合的な雑誌の体裁をとりたいのに、どうも論文に片寄ってきた。映画紹介を入れたり、の工夫はしているのだが……誰か、コラムや漫画やSFでも書いてくれませんか？

我々の研究会機関誌は年末発行なので、秋からは魔の季節がはじまる。私生活はほとんどなしの殺人スケジュールをこなして、やっと雑誌が一冊。できるだけ売れるようにと値段をおさえているため借金の山。少しでもそれを解消すべく、集会があると聞けば雑誌をしょって行商へ出かける。

皆さんきっと、同じでしょうね。これも、同じような考えを持つ人と語りあいたいがこそ。女性解放の未来をめざし、お互いに頑張りましょう。

連絡先 横浜市緑区長津田6-14-2

TEL 045-981-5940

現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第15号発行後に入荷したもの)

- 「月刊あごら95号—山口県青少年保護育成条例改正をめぐって」 (1985.2) 350円
- 「月刊あごら96号—生命の流れを見つめて (京都から)」 (1985.3) 350円
- 「月刊あごら97号—女から男から (柏から)」 1985年4月 (1985.4) 350円
- 「月刊あごら98号—女から男から (湘南から)」 (1985.5) 350円
- 「月刊あごら99号—均等法でこう変わる」 (1985.6) 350円
- 「We 5月号—結婚の風景」 (1985.4) 530円
- 「We 6月号—家族, その人間関係」 (1985.6) 530円
- 「We 夏期増刊—働き続けるために…子育て・くらし方 エトセトラ」 (1985.7) 700円
- 「We 7月号—離婚と子どもたち」 (1985.6) 530円
- 「We 8・9月号—法律と私たち」 (1985.7) 530円
- 「スタート (結婚と離婚を考える雑誌) No. 7—特集 男なんて勝手よとあきらめていませんか」 (1985.夏) 780円
- 「日本婦人問題懇話会報 No. 42—特集 女性の自立と子どもの未来」 (1985.6) 450円
- 「ウイメンズ・フォーラム'84—ゆれ動く現代 (女たちの明日を考える) 記録集」 日本婦人問題懇話会 (1985.5) 500円
- 「女性雑誌の日米比較研究 女性雑誌の徹底的調査」 女性雑誌研究会 (和光大学井上研究室) (1985.7) 1000円
- 「地域—家族 第24号—私たちの十年そしてこれから」 (1985.8) 200円
- 「地域闘争 No. 176 —特集 マジに女性問題は男性問題よ (上野千鶴子・高橋幸子対談) 他」 (1985.8) 500円
- 「婦人通信 6月号—小学生と大人たちの関係他」 (1985.6) 250円
- 「婦人通信 7月号—暴力の構図他」 (1985.7) 250円
- 「婦人通信 8月号—十代の性—ふえつづける中絶他」 (1985.8) 250円
- 「婦人通信 9月号—男性 “受難時代” 他」 (1985.9) 250円
- 「性と平等13号 (国際通信誌)—育児と仕事は両立するか (各国にみる)」 (1985.7) 300円
- 「女から女たちへ 49号」 (1985.初夏) 200円
- 「声なき叫び—感想文集」 声なき叫び京都上映実行委員会 (1983.9) 300円
- 「We Love 憲法—おたかさん憲法を語る」 (付録・復刻版あたらしい憲法の話 1947年文部省発行) 土井たか子編著 すくらむ社 (1985.6) 570円
- 「北海道女性史研究 第19号—特集 書評戦争と女たち・女たちの旅他」 北海道女性史研究会 (1984.6) 700円
- 「北海道女性史研究 第20号—特集 現在を生きる視点」 (1985.7) 700円

- 「世界の闘う女たちへ—85年夏 KENYA NAIROBI 国際婦人年世界会議にむけて」 不遠舎 (京都) 500円
- 「FEMINIST FORUM No. 6—Feminism in Japan and the world (英文)」 250円
- 「Our Opinions for Women's Liberation (英文)」 Tohkarajisya 500円
- 「WIFE 194—わが家の受験戦争」 (1985.7) 450円
- 「WIFE 195—箱庭療法でのぞいた “日本女性” のころのスペクタクル他」 (1985.9) 450円
- 「婦人通信 (社会主義婦人会議機関誌) No. 159」 (1985.5) 300円
- 「婦人通信 (社会主義婦人会議機関誌) No. 160」 (1985.6) 300円
- 「婦人通信 (社会主義婦人会議機関誌) No. 161」 (1985.7) 300円
- 「反天皇制運動資料 Vol. 3—Xデー状況を撃て!」 対談—加納実紀代・菅 孝行 (1984・12) 500円

——友の会事務局から——

皆様、暑かった夏をいかがお過してでしたか? 日が経つのは早いもので、この会報も次号で今年最終号となります。今年の会費まだの方はできるだけ早くお振込みください。(未納の方には振替用紙の通信欄に金額を記入させて頂いています) 1年分1,500円です。新規入会の方は入会金として500円頂戴しています。住所変更の方は至急お知らせください。退会される場合も必ずご連絡ください。よろしく願います。(美)

ウイメンズブック友の会主催

第3回 講演会のお知らせ

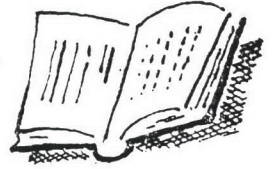
「フェミニズムの最前線」

- ・講師: 上野千鶴子
- ・とき: 1985年11月23日(土) 午後1時開場
講演 1時半より
- ・ところ: 京都市社会教育総合センター
4F大ホール
京都市中京区丸太町七本松西入ル北側
TEL 075-802-3141
- ・参加費: 一般 1,000円
ウイメンズブック友の会会員 600円

※参加御希望の方は松香堂へお申込み下さい。

— 書 評 —

「超 少 女 へ」



宮 迫 千 鶴 著

北 宋 社

わたし自身、「少女」であることにむずむずと居心地の悪さを感じる少女であったから、宮迫氏が本書を著した動機はよくわかる。

本書は、「星印少女になりそこねた少女」千鶴嬢のこだわりと苦悩の前半生をややコミカルに振り返った第一部と、そうした「非少女」の視点から「あしながおじさん」、「若草物語」などの少女文学を読み直した第二部、それに「ポーの一族」など新感覚の作品で一時代を画した少女漫画家萩尾望都（はぎおもと）論の第三部からなっている。

萩尾望都は初期の頃、少女漫画だというのに中性的な少年たちを主人公にして話題を呼んだが、これら「性器を持たぬ少年たち」（橋本治）は実は「リボンとフリル」（本田和子）に埋もれた「少女」の姿では表現できない「非少女」の感性を描き出す手立てだった、という宮迫説にわたしはハタと膝を打った。その萩尾がある時期から腹をくくったように「少女」を主人公にした SF を描き始めるが、この「少女」たちがスゴイ。『百億の昼と千億の夜』の阿修羅といい、『スター・レッド』のセイといい、宇宙の運命をかけ超能力を駆使して戦い抜く。少女漫画のステレオタイプなど意にも介さぬこれらのヒロインたちこそ「超少女」——「非少女」の否定性を超えて「女性原理」と「男性原理」を一身に体現する「両性具有者」なのだと、宮迫は高らかに宣言する。萩尾と宮迫という二人の「モト非少女」が表現者として立つまでのアイデンティティ模索の歴史に、わたしは共感を禁じえない。男社会の現実を「ひらひらと」すりぬけ、「良妻賢母像」にも「女権運動」にも「秘めやかなノン」をつきつける本田和子の少女（『異文化としての子ども』参照）も魅力的ではあったけれど、やはりわたしは「超少女」になりたいと思うのは世代のせいだろうか。本田の「少女」は結局良妻賢母予備軍の「近代的少女」なのだという宮迫の批判に、またまたうなずいてしまう。

現在「女性原理」復権の方向性をめぐって、男女の異質的相補性か、両性具有か、はたまた男女という二元論そのものを解体する「n個の性」かで論争がさかんだが、本書は気軽に楽しくそうした論争にはいっていき糸口ともなるだろう。

(落合恵美子)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性の目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものを寄せてください。

400字詰原稿用紙に約1枚半、600字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」。あなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。400字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。上記両方とも次号の締切は1985年10月10日。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入 松香堂書店「ウィメンズ ブックス係」です。

編集室から

◎女性論の各論争が展開されている本と参考文献や資料として引用されている本を中心に集めた特集目録論争をお届けします。力作が多く、また雑誌にも活発な論争が展開されています。戦後40年の女性の歩みを跡づける本も多く見られます。

◎次号（11月発行）は資料・全集・講座を特集します。

◎夏のブックフェアには暑い中を、多彩な方々にお集りいただきました。秋には講演会とブックフェアを予定しています。

◎著者ご自身の来店はうれしいものです。著書を読んでおられますと、はじめてお会いしても、はじめてお目にかかった気がしないから不思議です。良書は生きています。級友たちの原爆ドキュメント「広島第二県女二年西組」の著者関千枝子さんともそういう出会いでした。本号にも戦争と女に関する本を紹介しています。

(木下)